

紙プロジェクトニュースレター 年2回発行

# KAMIKAMI

7

号

6 January, 2012

アジアをあるいて  
フィリピン海外研修

フィリピンの大都市、ダバオ\*1。ダバオ国際空港からホテルまでの道のりで既にカルチャーショックを受けた。道路には車線がなく、当たり前のような追い越し運転には肝が冷やされる。だだっ広い道路を砂埃を上げながら走る自動車。バイクは大抵3、4人乗りでヘルメットはなし。その切れ目を縫いながら平然と道路を横切る行人。イメージ通り、まさしくアジアと

いった光景で、フィリピンに来たという実感が湧いた。ここは、混沌と無秩序とパワーで満ち溢れている。2011年9月25日から10月2日までの間、学生13名、教員4名によりフィリピン・ダバオを中心に海外フィールドワークを行った。フィリピンといえば真っ先にバナナが思い浮かぶが、ダバオはそれと並んでドリアンが有名である。私たちが訪問した時期には、どちらもあちこちの屋台で山積みになっていた。

市場を歩いているとき、売り場の女性から手招きされた。手にはスマートフォン。写真を撮ってほしいのかと思いきや、彼女はそれをもう一人の店番の女性に預ける。疑問を感じる間もなく私の腕を引いて一緒に写真に写った。これには驚いた。ダバオでは、当初心配していた治安の悪さは拍子抜けするほど感じなかった。

(文責 / 地域環境班1年 原田希望)



\*1 ダバオ…フィリピン南部の都市。20世紀初頭、日本人がアバカ(マニラ麻)の農園を始めたことから日本人社会が形成されたこととしても有名。

2011

# フィリピン

海外研修レポート

ダバオ市内のホテルを出てから約1時間半、窓の外には辺り一面にバナナプランテーションが広がっていた。バナナの木に両側を固められた道をしばらく行くと、手すき紙の製作をしている女性たちが住むカティプラン村に着いた。

KATAKUS とは、農村女性の地位向上に向けた支援を行っている NGO 団体だ。村にある工房では、

KATAKUS の支援を受けている女性たちが、ドリアン・アバカ（マニラ麻）・バナナといった現地の特産物の繊維を使い、紙を作っている。工房で働く6人の女性にインタビューした中で、彼女たちが「紙すきに携わってから、自信をもって自分のことを話せるようになった」といきいきとした表情で語っていたのが印象的だった。

ダバオ市内にある KATAKUS の事務所では、職員の Melba さんから KATAKUS の説明を受け、また奨学金を受給している学生と話をすることができた。

「まず学校を卒業して家族のために働きたい」と一人の学生が自分の将来設定を語ってくれたことが、とても印象に残った。



△バナナ農園の様子



△繊維となったバナナ



紙すきについて説明する Melba さん△

▽バジャウ人の子どもたち



▽スマートフォンを操る女性



▽市場の様子



9月27日には、難民のサポートを行う団体 UCCP の紹介で市内の海岸に面したバジャウ人の村を訪問する機会があった。バジャウ人は、フィリピン南部の少数民族で、近年まで海で船上生活を営んできた。今回私たちが訪れたのは、1970年代のフィリピン内戦のとき、南西部から移住してきたバジャウ人が形成した村である。村は海岸沿いにあり、高床の家が密集して建ち並んでいた。衛生環境はかなり悪い。村では、出生証

明書がないため学校に通えない子どもたちがより幼い子どもの面倒を見ていた。今の日本では見られない光景である。しかし、自分が写った写真を見てはしゃいだり、ペンと紙をもらおうとすぐさま絵を描きだし、完成した絵を見せに来たりするなど、日本の子どものと変わらない側面も見られた。

今回のフィリピンにおけるフィールドワークでは、紙を通じた農村女性をとりまく社会の理解を目的とし

ている。KATAKUS で働く女性たちに話を聞くだけでなく、バジャウ人の村に行くなど現地の空気を自分の肌で感じ、通常の旅行では行かないような場所を訪れることができた。また普段なら話すことができない人々と時間を共有し、話し合えたというのは、紙プロジェクトの海外フィールドワークの魅力であると実感した。

(文責 / 地域環境班 1年 清水藍)

# 白山祭に出展しました！

## 調査結果を解説



## 無料体験コーナーと裏紙ノート



## ご来場ありがとうございました！

## 地域との連携をはかる 第一歩に

2011年11月3日～5日、東洋大学白山祭が開催され、私たち紙プロジェクトも出展しました。各班の調査の報告・夏季休暇に行った海外研修の報告をまとめた展示をしたり、資源再利用の意識をうったえるため、廃棄されてしまうミスプリントを使った裏紙ノートを作成し、販売をしました。また、「来場者の方が楽しめるような場を提供したい」と思い、紙ひもで作るコースター手作り体験企画をおこないました。

3日間の来場者数は約300人にのぼり、例年以上に、多くの幅広い年代の方に足を運んでいただいたように感じます。中には、私たちの調査内容にアドバイスをくださる方もいて、今後の調査活動の発展につながるような意見もいただくことができました。また、体験企画については大変好評で、参加者が楽しんで作っていた姿がとても印象的でした。外部へ発信することを通して、紙プロ学生と来場者の方との相互交流がはかれた、充実した大学祭になりました。

実は大学祭の当日の朝まで準備が終わらず、私個人としては、成功するのかがどうか不安でした。しかし、結果として多くの方に紙プロを知ってもらうことができ、ようやく地域との連携をはかる一歩を踏み出したのではないかと考えています。これもひとえに、来場者の方、紙プロ学生の行動力や教員・大学の後援があってこそです。来年も、今年以上の成果を目標に、大学祭に参加して展示・企画に頑張ってもらいたいと思います。

(文責 / 地域誌班2年 内田愛美)

# ACTIVITY REPORT



## 地域連携シンポジウムを終えて——

2011年12月10日(土)、5回目なる東洋大学地域連携シンポジウムが開催された。今年度のテーマは、「紙に生きるひとと地域—小石川・東日暮里におけるフィールドワークと対話から—」である。

本年度の紙プロジェクトは、紙とかわりながら生活を営んできた人々に焦点を置き、フィールドワークを中心とした調査を行ってきた。本シンポジウムは、これらの研究の総括となる。

今回の特別講師、(株)丸山製本所代表取締役の丸山政利氏には、印刷・製本業の過去と現在における環境の

変化について、東日本大震災の復興支援も交えお話を頂いた。そして、荒川区リサイクル事業協同組合事務局長の杉崎勝雄氏からは「古紙回収業」という職種に対する偏見を払拭する為には、自らが改善に努めなければならないというお話を頂いた。

またコメンテーターの東洋大学国際地域学部准教授の子島進氏、大阪大学 GCOE 特任研究員の森田良成氏にも、それぞれ本シンポジウムに関するご感想と意見を頂き、特に子島氏のフェアトレードに関する話は、今後の紙プロジェクトの広報面について新たな風を吹かせるきっかけと

なりそうである。

今回、5回目を迎えた本シンポジウムは一般の方々の参加も例年より多く、総合討論では学生と参加者との間で白熱した討論がなされた。本シンポジウムは「個人」に着目することで、より地域の人々とのコミュニケーションが深まり、紙プロジェクトの目指す環境問題や地域振興のための「地域連携」を深めることができたのではないかと。そして、人々が抱える問題という点からも、新たな課題が見えてきた。本シンポジウムを通じ学んだことを生かし、これからもさらなる向上に努めたい。

(文責 / 地域誌班 1年 黒川穂)

## 各班リーダーの声

### 地域環境班

今回は、発表者と来場者がこれまでになく直接的に向き合えたものになりました。地域環境班は、荒川区東日暮里の古紙回収業に焦点をおいて調査活動してきました。シンポジウムの際に、私たちが無自覚に使っていた幾つかの言葉が、古紙回収業に携わってきた人びとにとっては失礼であり、不適切とのお指摘を当事者の方から頂きました。こうした厳しいご指摘をふまえ、私たちは調査活動における人びととの関わり方、作法を改めて問い直し、今後の活動に活かしていかなりません。調査をする側であった私たちが、調査をさせて頂いた東日暮里の方がたから忌憚のないご意見を頂き、互いが一歩踏み込んで議論を交わすことができたことが、シンポジウムの何よりの成果だと感じました。関係者の皆さんには、改めてお礼申し上げます。

(文責 / 地域環境班リーダー 3年 小高恭平)

### 地域誌班

今年度の地域誌班は、東洋大学そばの文京区小石川地区の印刷・製本業に携わる人々を調査しました。シンポジウムでは小石川地区で印刷・製本業を営む方々にお越し頂き、総合討論においてはオーディエンスも交えて意見の交換を行いました。このように意見交換を行う機会を頂いたことで、地域連携にまた一歩近づいたと考えています。また、紙プロの学生と印刷・製本業を営む方々と交流することができ、これからの調査に向けてよい刺激になりました。

最後になりますが、本調査にご協力いただいた皆様に、改めて感謝申し上げます。年度末に刊行する報告書は、シンポジウムの成果・反省を踏まえ、より納得のいくものになると信じています。楽しみに待っていてください。

(文責 / 地域誌班リーダー 3年 小野里志穂理)

## INFORMATION

### 紙プロ Web 情報



紙プロジェクト

検索

左のQRコードを読み込むか、「紙プロジェクト」で検索！

### 編集後記

もうすぐ年も暮れる。振り返ってみれば、全体的に皆とても積極的に行動していたことが分かる。今後はこれまでの経験や自省を次に活かしていきたいと思っている。

(文責 / メディア班 1年 高野敦子)

### 発行

発行元：〒112-8606  
東洋大学社会学部 東京都文京区白山 5-28-20  
社会文化システム学科 TEL：03-3945-7439  
発行責任者：三沢伸生 FAX：03-3945-7626  
連絡先：  
kamiproject\_2011@livedoor.co.jp



本誌は東洋大学「体験型教育プロジェクトによる地域連携の推進」より発行しております。